

親子の信頼関係尺度に関する予備的研究

浜崎隆司*, 田村隆宏*, 吉田和樹**,
吉田美奈*, 岡本かおり***, 安藤ときわ*,
倉成正宗****

(キーワード：親子の信頼関係尺度, 信頼性, 妥当性, 質問紙調査法)

目的

親に叱られて心地のいい子どもはいない。叱られれば誰だって怒りを感じる。それでも、すぐに自分が悪かったと反省できるような子どももいる。自分が叱られても好きで尊敬できる親とは、子どもとの間にどのような関係を築いているのであろうか。

子どもたちが、健全な生活を送っていくためには、親や親友などの重要な他者 (significant other; Sullivan, 1953) との間に基本的信頼感 (Erikson, 1963) を形成していることが重要である。例えば Bowlby (1976) の愛着理論では、乳幼児期に親との関係が適切で応答的な関係であるほど、その時期やその後の子どもの精神的な安定性が高いことが指摘されている。Perlman & Peplau (1989) は、児童期に親との関係において暖かさの欠如が成人期の孤独感をもたらすことを示唆している。

近年、親子の関係において重要な要因の1つとして信頼関係があげられている。特に、親との間の信頼関係が思春期までに形成できていることが、子どもの心理的健康や行動問題などに大きく影響していることが指摘されている。

例えば、叱る側と叱られる側との信頼関係について注目した松田・児島 (2002) の研究では、親が子どもに同じ叱り方をしても受け止め方に違いが見られ、「感情表出 (叱り方のパターンの1つ)」に関しては、叱りの受け止め方が、親との信頼関係の有無 (子ども自身が親から愛されているか) によって影響を受けるという研究や、叱られた行為の修正には、母子間の情緒的な関係の安定性を子どもがどう認知するかということが重要であると示唆される (藤田・丸野1992)。そのほかにも児童・思春期における親子関係間の信頼関係に基づいた子どもへのしつけの質や管理、サポートが子どもの反社会的傾向や問題行動に関連していることが指摘されている (Farrington, 1978; Patterson, 1986; Flannery, Williams & vazsonyi, 1999; Fondacaro & Heller, 1983; Wills & Cleary, 1996)。

親子の信頼関係と学校適応の研究もみられる。酒井・菅原・眞築城・菅原・北村 (2002) は、中学生の学校適応の諸側面について、親および親友との信頼関係との関連から検討した。親子相互の信頼感において、子どもの学校適応に影響を与えているのは子が親に抱く信頼感であること、また子が親に抱く信頼感に関しては、母親に対するものばかりではなく父親に対する信頼感も学校適応に重要な役割を担うことが示唆された。さらに、親子間相互の信頼感得点の高低から分類した親子の信頼関係タイプによる結果では、総じて親子相互信頼群の子どもの学校適応がほぼ良好であるのに対し、親子相互不信群の子どもは学校に不適応な傾向が示された。このように親子の信頼関係が、学校適応の諸側面影響にしていることが示唆されている。

子どもが親を信頼できると確信する要因として、親の養育態度、親の人生観、価値観、親の役割などさまざまな視点が考えられる。また、親との関係に限らず、我々の生活で人との信頼関係は欠かすことが出来ない重要な概念であり、親子との信頼関係にとどまらず友達や教師と生徒、恋人、上司と部下、夫婦等での信頼関係も重要

*鳴門教育大学大学院

**神戸市立藤原台小学校

***洗足こども短期大学

****赤穂市立塩屋小学校

である。特に、人生の出発点でもある親子関係において信頼関係が形成されるならば、その後のさまざまな対人関係の中での信頼関係の構築に重要な影響を与えられとされる。そのような意味で、親子関係における信頼関係の尺度を開発することは、その後の子どもの成長過程における社会性や情緒性の健全な発達にともなう重要な指標となること考えられる。そこで、本研究では、酒井ら（2002）の研究でもあきらかにされたように、子どもからの親への信頼感が重要と考え、親から子どもへとというよりも子どもから親への信頼感に焦点を当て、人生最初の人間関係でもある親子の信頼関係の尺度を開発することを目的とする。

方 法

親子の信頼関係尺度の質問項目を作成するために、「子どもからみて信頼できる父親とはどんな父親だと思いますか」「子どもからみて信頼できる母親とはどんな母親だと思いますか」について、自由記述で大学生78名に回答を求めた。調査期間は、平成21年12月～平成22年2月であった。得られた内容について心理学を専攻する大学院生2名と研究者1名で、分類を行った。その内容は、大きく「受容（自分のことを見守ってくれている等）」「家事（家事を要領よくやっている等）」「家族（家族をまとめている等）」「叱る（自分のために叱ってくれる等）」「パーソナリティ（向上心をもっている等）」「サポート・アドバイス（悩んだ時や困った時アドバイスをしてくれる）」「養育態度（優しく接してくれる等）」などが含まれていた。項目内容の類似や重複した内容を整理し選定した。その結果、47項目に整理された。

平成22年2月～5月にかけて大学生・大学院生333名（男性28名、女性305名）に質問紙調査を行った。欠損値等のある回答をのぞき有効回答数は287名であった。質問紙は、父親でも母親でも共通する項目とした。質問紙は、尺度の構成概念妥当性を検討するため、自由記述から得られた47項目に、落合・佐藤（1996）の母子関係からみた親子関係項目30項目を加えて総計77項目の項目とし、すべて5件法で回答させた。加えた30項目の内訳は、「子が親から信頼・承認されている親子関係（以下信頼承認と略す）」20項目と「子が困った時には親が支援する親子関係（以下困難時の支援と略す）」10項目である。信頼承認の項目は「親は、子どもの事を信じているのであまり口うるさくない」というように、子どもが母親から信頼され、一人前の人間として認められているような親子関係の内容である。また困難時の支援の項目は、「親は、私が友人の事で困った時にはいろいろ教えてくれる」というように子どもが困っているときに助けたり、励ましたりして子どもを支えるというような親子関係を示すものである。落合・佐藤（1996）では、30項目とも「母親は…」もしくは「父親は…」という文頭を本研究では、「親は…」という表現にした。

結 果

(1) 因子分析

まず、信頼関係項目47項目の質問項目の選択肢「まったくあてはまらない」～「かなり当てはまる」に対して1～5点を与えて、各回答の平均値と標準偏差値を算出した。その後、信頼関係尺度47項目について因子分析（主因子法）を行い、8因子を得たため、因子数を8因子として、再度因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。因子負荷量が.450以下の項目および、第8因子が1項目となったため、因子負荷量が.450以下および第8因子の項目を削除し、因子数を7因子とした上で再度因子分析を行った（主因子法・プロマックス回転）。最終的に28項目を選出した。結果はTable 1に示す。

次に、抽出された7因子について、次のように命名した。因子Ⅰについて、「何かあれば手を差し伸べてくれる」「見守られていると感じる」「いつも自分のことを考えていてくれる」というように、いつも自分が親から見守られているという思いがあり、何かあるときには頼りになるというような内容を示しており「見守られ」因子と命名した。因子Ⅱについて、「悩んだ時や困った時、アドバイスをくれる」「真剣に相談に乗ってくれる」「何かあると自分のために時間を割いてくれる」など、子どもがトラブルや悩みを抱えたときに相談の対象としての親の存在がうかがえる。そこで、「相談相手」因子と命名した。因子Ⅲについて、「会話の中で素直に感情を出すことができる」「ありのままの自分で接することができる」「自分の感情をありのままに受け止めてくれる」など、親子の間で自分をありのままに素直にだせる存在であることを子どもが確信するような内容であり、「自己受容」因子と命名した。因子Ⅳについて、「家族のために頑張っている」「家族から尊敬されている」「家族をまとめている」というように、家族の中での親の役割や機能を示している。家族のまとめ役としての親の役割を示してお

Table 1 信頼関係28項目の因子パターン行列

	I	II	III	IV	V	VI	VII
F I : 見守られ ($\alpha = .92$)							
24 何かあれば手を差し伸べてくれる	.871	.165	-.086	-.015	-.009	-.073	.002
23 自分を愛してくれている	.845	-.104	.051	-.108	.020	.101	.031
25 困ったときやトラブルに巻き込まれた時、対処してくれる	.789	.063	.021	.067	-.108	-.112	-.072
22 見守られていると感じる	.779	-.076	.063	.026	.042	.058	-.014
32 自分のことを心配してくれる	.675	-.026	.059	.016	.039	.053	-.002
17 いつも自分の味方でいてくれる	.562	.202	.023	.054	.029	-.056	.081
31 いつも自分のことを考えてくれている	.494	.159	.156	.048	.009	-.003	.004
F II : 相談相手 ($\alpha = .90$)							
14 悩んだときや困ったとき、アドバイスをくれる	-.109	.841	.043	-.022	.075	.085	.045
16 真剣に相談に乗ってくれる	.027	.756	-.049	.017	.030	.101	-.008
13 一人でできないことを手伝ってくれる	.120	.692	-.067	.166	-.026	-.126	-.044
18 悩みを聞いてくれる	.144	.643	.163	-.147	.037	.057	-.009
19 何かあると自分のために時間を割いてくれる	.386	.568	-.112	-.010	-.080	.063	-.032
F III : 自己受容 ($\alpha = .90$)							
29 会話の中で素直に感情を出すことができる	.073	-.133	.909	.017	-.007	-.045	.008
28 ありのままの自分で接することができる	.000	.057	.805	-.090	.054	.072	.060
30 自分の感情をありのままに受け止めてくれる	.236	.104	.575	.089	-.065	.056	-.073
27 甘えることができる	.013	.346	.535	.014	.005	-.078	.029
F IV : 親役割 ($\alpha = .77$)							
3 家族のために頑張っている	-.006	-.019	.056	.789	-.077	-.020	.049
4 家族から尊敬されている	.082	-.063	-.022	.674	.099	.059	.115
2 家族をまとめている	-.027	.172	-.080	.652	.074	.022	-.092
F V : 親の向上心 ($\alpha = .76$)							
11 向上心を持っている	.062	.072	-.138	-.059	.869	-.047	.077
9 物事に対して広く興味・関心を持っている	-.033	.101	.055	-.022	.676	-.066	.045
10 自分の考えを持っている	-.088	-.138	.147	.176	.653	.052	-.183
F VI : 親の支援 ($\alpha = .85$)							
38 何かをやり遂げた時、褒めてくれる	-.181	.165	.099	.048	-.108	.847	-.030
39 何かをやろうとする時、応援してくれる	.150	-.035	-.092	.026	-.001	.818	.032
40 自分を一人の人間として尊重してくれる	.313	-.057	-.018	-.074	.110	.568	-.008
F VII : 親の感情抑制 ($\alpha = .70$)							
45 感情的になりやすい	-.026	.022	.057	-.049	.025	-.145	.707
47 自分の間違いを認めない	-.020	.009	.023	.109	-.076	.063	.668
15 意見を押し付けられたと感じたことがある	.008	-.060	-.030	.024	.023	.106	.623

因子間相関	I	II	III	IV	V	VI	VII
I		.740	.685	.461	.473	.687	.417
II			.678	.403	.424	.593	.282
III				.326	.311	.604	.332
IV					.435	.414	.207
V						.456	.082
VI							.312

り「親役割」因子と命名した。因子Vについて、「向上心を持っている」「物事に対して広く興味・関心を持っている」「自分の考えを持っている」など親自身の人生観・価値観に関わるものであり、親が前向きな姿勢であることが信頼できる理由となっているので「親の向上心」因子と命名した。因子VIについて、「何かやり遂げた時、褒めてくれる」「何かやろうとする時、応援してくれる」「自分を一人の人間として尊重してくれる」というように、子どものやることに賛同し、応援や支援をするような親の態度が示されており「親の支援」因子と命名した。因子VIIについて、「感情的になりやすい」「自分の間違いを認めない」「意見を押し付けられたと感じたことがある」というように、親が子どもの前で感情的にならず、冷静な態度で子どもに接することが示されており「親の感情抑制」因子と命名した。

(2) 信頼性の検討

下位尺度ごとに得点の平均値を求め下位尺度得点とした。抽出された7因子について α 係数を求めた結果、因子I： $\alpha=.92$ ，因子II： $\alpha=.90$ ，因子III： $\alpha=.90$ ，因子IV： $\alpha=.77$ ，因子V： $\alpha=.76$ ，因子VI： $\alpha=.85$ ，因子VII： $\alpha=.70$ であった。

(3) 妥当性の検討

構成概念妥当性を検討するために、本研究の親子における信頼関係尺度と落合・佐藤（1996）の母子関係からみた親子関係項目の内、「信頼承認」20項目と「困難時の支援」10項目との相関係数を算出した。

その結果、Table 2 に示されるように、本研究の7因子の内、「見守られ」因子、「相談相手」因子、「自己受容」因子、「親役割」因子、「親の向上心」因子、「親の支援」因子の6因子と落合・佐藤（1996）の「信頼承認」、「困難時の支援」との間に有意な正の相関がみられた。また本研究の「親の感情抑制」因子と「信頼承認」、「困難時の支援」との間に有意な負の相関がみられた。

Table 2 信頼関係尺度と信頼承認、困難時の支援尺度（落合ら1996）との相関

	見守られ	相談相手	自己受容	親役割	親の向上心	親の支援	親の感情抑制
信頼承認	.65**	.55**	.58**	.41**	.34**	.65**	-.45**
落合ら(1996)で 抽出された因子							
困難時の支援	.71**	.72**	.64**	.38**	.45**	.62**	-.31**

** $P<.01$

考 察

尺度の信頼性についてはクロンバックの α 係数による検討を行い、抽出された7因子の α 係数はともに.70～.92と、内的整合性の観点よりおおむね高い信頼性が示されたと考えられる。

本研究の7因子の内、「見守られ」因子、「相談相手」因子、「自己受容」因子、「親役割」因子、「親の向上心」因子、「親の支援」因子の6因子と落合・佐藤（1996）の「信頼承認」、「困難時の支援」との間に有意な正の相

関がみられた。また本研究の「親の感情抑制」因子と落合・佐藤（1996）「信頼承認」、「困難時の支援」との間に有意な負の相関がみられた。「親の感情抑制」の項目は逆転項目であり、負の相関が有意であるということは、親が感情を抑え理性的な態度であればあるほど「信頼承認」「困難時の支援」の尺度と高い正の相関があることを意味している。以上の結果は予想される結果であり、本尺度は十分な妥当性を備えていることが示された。

「見守られ」因子や「自己受容」因子にみられるように、ありのままの自分が親によって受容され、いつでも見守られているという確信が、親への信頼につながるようである。一般に、子どもにとって家庭は、ありのままの自分を受け入れてくれる場所であって欲しいし、親は自分を見守ってくれ、何か悩みや問題が生じたときには、「相談相手」因子や「親の支援」因子にみられるように、いつでも話を聞きアドバイスや支援といった援助を与えてくれるという思いや安心感が、親子の信頼関係を確かなものにしていくのではないかと考えられる。

また結果から、親の役割や性格、人生観といったものも信頼関係が親子の信頼関係に大きく影響していることが伺える。例えば、「親役割」因子にみられるように、親が家族のリーダーやまとめ役、支えとなっていることが、親に対する子どもの信頼を高める要因となっていること。さらに「親の向上心」因子にみられるように、親自身の価値観や人生観における前向きな姿勢などが子どもからの信頼感を高める要因となっていることが示唆されよう。

本研究の信頼関係に関する因子が、落合・佐藤（1996）の「信頼承認」、「困難時の支援」因子との間に有意な相関がみられた。落合らの「信頼承認」には、子どもを大人として扱い、信頼し、子どもの意見を尊重するような項目が含まれており、特に本研究の「見守られ」や「自己受容」と類似した概念と推察され相関の値も高かった。また「困難時の支援」も本研究の「相談相手」や「親の支援」と類似するものであり高い相関がみられた。これらの結果は、子どもが親を信頼できる条件とは、親が子どもを1人前の大人として認め、子どもの意見も聞き、一方で子どもに何か問題や悩みが生じたときには、親が相談相手となり時には助けたり励ましたりして支えてくれるという関係を示している。

本研究は、親子の信頼関係尺度開発の予備的研究である。今後の課題として、尺度のさらなる信頼性妥当性の検討を加え、この尺度をどのように活用するかその方向性を示す必要がある。例えば、信頼できる親とは、子どもにとって自分の味方になってくれ、どんなときにも自分を守り、支えてくれる存在である。そのような親から褒められたり、叱られたりすると、どのような褒め方や叱り方であろうとも子どもの心の中に書きとめられると予想される。上手な褒め方叱り方といった形式によるマニュアル的しつけではなく、信頼関係に支えられ、子どもの心に響く親の養育とは何かといった研究や調査がこの尺度を使用することで可能になると思われる。また、今回、調査対象者は女性が大半を占め性差の検討が行えなかった。男性から見た父親、母親と女性からみた父親、母親への信頼の観点において差異も予想されることから、以後の研究において性差の検討も必要であろう。

本研究では、落合・佐藤（1996）の親子関係尺度の一部と高い正の相関が見られたが、落合らの研究は、青年期の親子関係に焦点が当てられており、親子の関係が5段階を経過して心理的離乳へと向かって変化することを指摘している。その段階の中に、親の子どもへの支援や親の子どもへの信頼・承認などが心理的離乳に重要な役割を果たしているという指摘からも、親と子どもの信頼関係は年齢とともに質的变化が考えられる。幼児期、児童期、青年期、成人期と各時期における親を信頼する理由の変化をも考慮し、今後発達の視点を取り入れた尺度の検討も必要であろう。また、親に限らず、人生の中で出会う仲間や友人、先生、親友、恋人、配偶者といった対人関係の中で生じる問題や問題解決がその相手との信頼関係によって大きく影響を受けることは十分予測されることである。対象を限定したそれぞれの信頼関係の尺度開発が必要になると思われる。

引用文献

- ボウルビィ J. 黒田実郎・大羽藁・岡田洋子・黒田聖一（共訳） 母子関係の理論 I 愛着行動。
岩崎学術出版社（Bowlby, J, 1969 Attachment and loss: Vol.1 Attachment. New York: Basic Books.）
1976.
- Erikson, E. H. *Childhood and society* 2nd ed. New York: Norton. (仁科弥生（訳） 1977幼児期と社会1
みすず書房) 1963.
- Farrington, D. P. The Family backgrounds of aggressive youths. In L. A. Herson, M. Berger, & D. Shaffer (Eds.), *Aggression and antisocial behavior in childhood and adolescence*. Oxford: Pergamon. 1978.
- Flannery, D. J., Williams, L. L., & Vazsonyi, A. T. Who are they and what are they doing? Delinquent

- behavior, substance use, and early adolescents' after-school time. *American Journal of Orthopsychiatry*, 69, 247–253. 1999.
- Fondacaro, M. R., & Heller, K. Social support factors and drinking among college student males. *Journal of Youth and Adolescence*, 12, 285–299. 1983.
- 藤田敦・丸野俊一 親の叱りことばの受容過程における子どもの状況認知の役割 九州大学教育部紀要（教育心理学部門）37（2），133–142. 1992.
- 松田君彦・小嶋晃代 親の叱りことばの表現と子どもの受容過程に関する研究（1）鹿児島大学研究紀要 教育科学編，54，187–203. 2002.
- 落合良行・佐藤有耕 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究，44，11–22. 1996.
- Patterson, G. R. Maternal rejection: Determinant or product for deviant child behavior? In W. Hartup & Z. Rubin (Eds.), *Relationships and development*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. 1986.
- Perlman, D., & Peplau L.A. Toward a social psychology of loneliness. In R. Glimour, & S. Duck (Eds.), *Personal relationship: Personal relationships in disorder*. London: Academic Press. 1981.
- Sullivan, H.S. *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton. 1953.

The preliminary study on a scale of parent–child confidential relationship

HAMAZAKI Takashi*, TAMURA Takahiro*, YOSHIDA Kazuki**,
YOSHIDA Mina*, OKAMOTO Kaori***, ANDO Tokiwa* and
KURANARI Masamune****

(Keywords : parent–child confidential relationship, reliability, validity, questionnaire survey)

The purpose of this study is to make a scale of parent–child confidential relationship and to examine the reliability and validity of the scale. 47 items questionnaire survey was administered to 287 university and graduate students. Cronbach's alpha for 7 subscales ranged from .70 to .92, and that showed enough reliability of this scales. The results of correlational analysis of the parent–child confidential relationship with the Parent –Child Relation scales (2 subscales 30 items) by Ochiai and Satoh (1996) suggested that had enough construct validity. Finally, the implications of this study was discussed.

*Graduate School of Education, Naruto Univesity

**Fujiwaradai primary school in Hyogo Prefecture

***Senzoku Child junior college

****Shioya primary school in Hyogo Prefecture